
超 変態的彼女。

白雪なずな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超 変態的彼女。

【Nコード】

N3869L

【作者名】

白雪なずな

【あらすじ】

男性向け「ハーレム小説」属性です。サブタイトルにのついた話はR15です、ご注意ください。 純粹で、透明な笑顔。愛くるしく、黒目がちで大きな瞳。どこをとっても可憐な僕の彼女。しかし——“私ね、誰にも言えない秘密があるの”どこまでも引き込まれてしまいそうな、深い色をした彼女の笑み。あれが、あの一言がすべての始まりであった。

第一話 秘密はヒミツ〔1〕

お互いに猫を被り、表面的に付き合っているのが、果たして恋愛といえるのか？

ずっとそう思っていた。しかしそれは、あくまで相手が普通だったら、という前提の下にある。そう。深入りしすぎることは、同時に危険な可能性を含んでいるものだ。

——“私ね、誰にも言えない秘密があるの”

どこまでも引き込まれてしまいそうな、深い色をした彼女の笑み。あれが、あの一言がすべての始まりであった。

超 変態的彼女。 第一話 〳秘密はヒミツ〵

あれはあの日の放課後だった。

僕はまさかその日が忘れられない一日になるなんて、知りもしなかったわけである——

「修ちゃん」

教室の入り口から、聞きなれた鼻にかかった声が、僕のあだ名を呼んだ。

覚悟してただけに、来た、と思った。背筋に冷たい汗が流れる。緊張で彼女を直視できない。

けれどしつかりしないといけない。

朝起きた時から、今日こそは聞いてやろう、と決心していたのだ。

「一緒に帰ろっ？」

そう言っ、彼女がにこり、とまるで天使のような顔でほほ笑む。見慣れてはいるが、彼女の笑顔はやはりため息ものだ。

しかし今日はそれどころではない。

放課後、彼女が僕を迎えにきて一緒に帰るのは、もはやお決まりの話だが。

今日は一大決心をした僕、彼女を問い詰めるつもりであった。

そんな僕の内心に彼女は気付いているのかどうなのか。

どちらにせよマイペースな彼女の知った話ではない。

迷いなく僕の席まで歩いてくると、帰ろ、なんて言いながら僕の制服の裾をつんつんと引く。頬をほんのりピンク色に染めて。少しの恥じらいを見せる彼女。けれど僕を見てはにかむ。

僕の、初めての恋人。初めての彼女。付き合い始めてちょうど一

年と三か月。

純粹で、可憐な瞳。甘えてじゃれたかと思えば、いたずら心も忘れない。

彼女はネコ属性だ。全体的にネコなのだ。

しぐさや表情、気まぐれなその性格、ふわふわとした茶色っ毛。

けれどもそのくせ八重歯が愛くるしく、黒目がちで大きな瞳。

安藤あさひ——彼女は学年内でも、可愛い子だと、ちょっとした有名人だった。

そしてごく一般市民的な僕とは不釣り合い——

「あ、あのさ、」

帰り道、僕は何気なさを装って、思い切って切り出した。

ずっと素朴な疑問だったのだ。

彼女が——あさひがきょんとした顔で僕を見るので、僕の背中にまた冷や汗が。

しかしここでくじけてはいけない。

「どうして……僕と付き合いおうなんていったの？」

決定的な一言であった。

そしてこれが、およそ一年にわたって僕が抱え続けていた疑問である。

人が聞けばなぜそんなことを、と不思議に思っほど、なんでもない簡単なことだろう。

けれども機会を逃すうちにきけなくなってしまうた。

どうしてそんな簡単なことが聞けないのか、と自分でも思っただが、なぜか聞きづらいのだ。そういった話になると必ず、あさひはうまくごまかし、自然に違う話を切り出すのだ。

中肉中背、成績も中、運動も人並み。

容姿についても、可もなく不可もなく。

学校でも目立つことなく、まさに普通な僕である。

しかも彼女とはクラスは別で、関わりもまったくと言っていいほどなかった。

それなのに、驚いたことに告白してきたのはあさひのほう。

彼女ほどの人物がどうしてそんな僕を選んだのか。

今まで長く付き合ってはきた。

今となっては彼女の気持ちを疑ったりはしていないが、僕にはどうしても単純に納得できない部分があった。

付き合っつけかけ。そこに何か、裏がある……様な気がする。

僕の直感がそう訴え続けてきたのだ。

「……。んー。まあ、さ。恋に理由なんてないでしょ？」

けれどあさひは適当よろしくな口調でさらりと返してきた。

あまりにさらつとしているので、僕はそれ以上突っ込めない。

確かにそれは正論ではあるが、僕が聞きたいのはきっかけという部分なのだ。

曖昧にぼかしているようにしか感じ取れない。

けれどあさひはそんなことを考えている僕を知ってか知らずが、

小首をかしげてまた口を開いた。

「それより今日、私の誕生日だよ！ 修ちゃん、忘れてたでしょ！？」

「え……、えっ！？」

驚いた僕は素っ頓狂な声をあげてしまった。

と同時に、焦りが僕を支配する。

最悪だ。わざわざ何カ月も前から、あさひの誕生日のプレゼントを考えに考え、悩んできたのに。肝心な誕生日を忘れるなんて台無しだ。

……いやでも、今日はまだ2日のはずだ。おかしい。

あさひの誕生日は22日のはずじゃないか。

そんなことを考えていると、僕を見ていた彼女がおかしそうにふき出した。

「あは、ウソだよ。知ってるでしょ？ あははっ！」

あさひはさもおかしそうに笑う。

いつもこの調子である。またごまかされてしまった。

いつもならば良しとするところだが、しかし今日こそはそうはいかない。

「あさひ」

いつもはあさひに甘い僕ではあるが、少し口調を強めて彼女の名前を呼んでみる。

するとさすがにまずいと思ったのか、彼女は笑うのをやめた。

彼女はやがて観念したように、短くため息をつき。

「もう、限界かな……？」

ぼそりと、そんなことをつぶやいた。

明るく屈託なく、鼻にかかっているはずの彼女の声のトーンが、今まで聞いたことないほど暗かった。

そしてその表情である。衝撃的であった。

今まで見たこともない、陰りのある、まるで共犯者のような笑み。

本性——という単語が無意識のうちに僕の頭に浮かぶ。

何となくぞつとした僕は、思わず後ずさりしながらためらいがちに声をかける。

「あ、あさひ？」

「修ちゃん。——私ね、」

言葉を切り、そこであさひはいつもの愛くるしい笑顔を作り、僕の手をきゅつと握る。

その笑顔が、いつも通りの透き通った純粋な瞳が、逆に不気味なのだ。

反射的に逃げようとする僕の手を、あさひは意外にも強い力で逃すまいとばかりに握ってくる。

「……誰にも言えない秘密があるの」

そう、夢にも出てきそうなの日。やはりあれが、すべての始まりであった。

第一話 秘密はヒミツ「2」

空気すら重く感じた。息をするのが、重いのだ。

それは僕自身の気持ちからくるのか、それとも目の前の彼女の雰囲気によるものなのか。

あさひの手が信じられないくらい力で僕の手を握っている。

なんだか嫌な汗をかいてしまった。僕は完全にたじろいでいた。

彼女はすでにいつもどおりに笑っているはずなのに。

いつもどおり、天使のような笑顔。

そうだ、目の前にいるのは愛すべき僕の、純粹で可憐な彼女だ。

秘密の一つや二つ、きっとその内容も他愛のない可愛らしいもの、そつにきまっている。

そう自分に言い聞かせてみるのだが。

僕の生唾を飲み込む音が、むなしくその場に響いた。

「ひ、秘密って……？」

ためらいがちに問いかけてみる。

するとあさひは、不敵に笑った。

いちいち驚かされる。これもまたあり得ない表情である。

今までの、可愛らしくて奥ゆかしい彼女がこんな表情をするなんて考えられない。

「……知りたい？」

不敵な笑顔のまま、あさひが僕を試すような口調で問いかけてきた。

探るような目線にさらされている。

危険だ。これ以上踏み込むな。僕の直感がそう訴える。

「知りたいなら、ついてきて」

何も言わない僕に、けれどあさひはそう言って、僕の手を開放し、さつさと背を向けて歩きだしてしまった。

動揺する僕。迷う暇もなく、答えを迫られる展開であった。

このまま帰ってしまおうか。そう思った。

しかしその瞬間、頭に浮かんでくるのだ。

あさひの透明な笑顔、僕を“修ちゃん”と呼ぶ時の鼻にかかった甘い声、可憐で大きな瞳。

多分このままついていかなければ、僕は永遠にあさひを失ってしまっただろう。

そんな事を思っていると、いつの間にか、僕の足は自然に動き出していた。あさひの後を追って。

前を歩くあさひは終始無言だ。僕を振り返りもしない。

歩いたことのない道であった。

ひたすらに、あさひの歩くままついていく。

そうして十分くらい歩いたのだろうか。

あさひが、門構えの立派な大きな家の前で立ち止った。

「ここね、私の家。連れてきたことなかったよね」

ようやく振り返ったあさひが、いつものかわいい声で照れたように言いながら門を開ける。

なるほど、表札には安藤と書いてある。

お嬢さまだとは聞いていたが、ここまでとは。

いやしかし今はそれどころではない。

家だなんて、完全にあっちのテリトリーではないか。

僕の頭の中の危険信号が、さっきから大きくなっている。躊躇している僕に気付いたのか。

「どうしたの？ 修ちゃん。……帰る？」

そう言つて、あさひが今にも泣き出しそうな顔をした。ドキッとした。僕はあさひのこの顔に弱い。

僕はあせりつつ口を開いた。

「いや、帰らないよ。だからそんな顔しないでよ」「そう……。よかった」

あさひはすぐにつこりと笑った。しまった。さっきの顔はわざとか。

僕がどう反応するか、あさひは見越していたのか。

そうしてまたあさひについていくだけの僕は、部屋まで連れて行かれた。

あさひの部屋は、意外にも予想通りの女の子らしい部屋だった。ぬいぐるみがたくさん飾っており、ピンクを基調とした可愛らしい部屋。

僕だって男である。

あさひの部屋にいつか行ってみたいという気持ちはあった。けれどもこんな形で連れてこられても、どうにも構えてしまってそれどころではない。

「修ちゃん？ レモンティーは嫌い？」

あさひが僕の目をのぞきこんで、小首をかしげる。

すぐ後ろにソファもあるのに正座して、出された紅茶も一口も飲まない僕である。確かに不自然だ。

けれど不自然だというならあさひのほうである。さつきからまるつきり、いつもどおりのあさひなのだ。

透明な笑顔もそのまま。警戒している僕が馬鹿のようである。もしかしたら、僕の勘違いだったのだろうか。秘密なんて、実はやっぱり大したことなくて。

「いつか修ちゃんを、招待したかったんだあ。なんだか夢みたい」
紅茶のカップを持ったあさひはそう言って、えへ、と照れたように笑う。

可愛い。どうしてこんな純粋な子を警戒する必要があったのか。やっぱり僕の勘違いだったようだ。

「ごめん。僕、あさひのこと誤解してたみたいだ」

僕が正直に白状すると、あさひがちらと僕の様子を窺うようにこちらに視線をやってきた。

「……誤解？」

あさひがやけにゆつくりと、僕の言葉を復唱する。
その顔に、小さな笑み。瞬時に僕の背中を駆け抜ける、冷たい空
気。

「誤解じゃないんじゃない？」

言いながら、かちゃ、と音を立ててあさひがカップを机に置く。
あさひの瞳の色が、僕をとらえる。
さつき帰り道で見たのと同じ、一度とらわれたら逃げだせないよ
うな深い色。収まりかけていた危険信号が、再び頭の中で大きく鳴
り響き始める。

「学校の誰も知らないの。私の秘密。だから……」

あさひがそこまで言った瞬間、とん、と掌で肩を押されて。
あさひの表情にばかり気を取られて油断していた僕は、簡単に倒
れこむようにしてソファに背中を預ける。

「修ちゃんにだけ、教えてあげるね？」

いつの間にか僕の至近距離にまで来ていたあさひが、にこりと笑
う。

展開を理解できないまま、冷たい自分の汗を感じる。
僕は再び、生唾を飲み込んだ。

第一話 秘密はヒミツ〔3〕

身の危険を覚える状況である。

まさかこんな展開になるなんて、昨日までの僕なら考えるどころか信じることもすらできなかっただろう。ここに他人がいなくてよかった。人が見たら、あさひが僕を押し倒しているように見えるだろうか。

……“ように見える”？ そうじゃない。まさに押し倒されているのだ。

まさか男の自分が押し倒される日が来るなんて、夢にも思わなかった。

しかも、その相手がまさか――

緊迫した状況の中、のんきにそんなことを考えていると、ふとあさひが僕に向かって手を伸ばした。

びくりとして身構える僕。

あさひが、掌で僕の頬に触れる。

「どうしたの？ そんなにおびえた顔して。ねえ……、修ちゃん？」

僕の頬を撫でながら、あさひがくすりとダークな笑みを浮かべる。あの純粋なあさひと同一人物だなんて信じられない。

しかもその色気と言ったら、そこらのグラビアアイドルなんて目

じゃない。

動悸がした。僕だって男なのだ。

しかも、目の前にいるのは大好きな彼女。

ドキドキしないわけがない。

けれどもそれ以上に、動悸の理由の半分を占めるこの恐怖心。
狙われた獲物の心境とは、まさにこれだろう。

「私ね、修ちゃん。外見がこうだから……いつも、ピュアな子だ
て思われるんだ」

僕の心情を知ってか知らずか、あさひがマイペースに僕の首筋を
撫でながら話し始めた。

「私、みんなが思ってるような子じゃないのになって、ずっと思っ
てた。私らしくいたい。だけど、それじゃだめだってことに気付い
たの。人って、イメージを大切にすることから。いかにも純粋な私が、
純粋でなかったら、……失望するの」

話しながら、あさひの瞳が、少し哀しげな色を映した……ように
思えた。

すぐに元のダークな笑みに戻っていたからだ。僕の気のせいだっ
たかもしれない。

それにこの状況、あさひの表情がどうかいつている場合ではな
い。

何も言えない僕、けれどもあさひは手を休めることなく、まだ続
ける。

「だから、本当の私を秘密にした。表の顔は、純粋で可愛い私。

「だけど本当はね……」

言葉を切り、僕の耳元に唇を寄せるあさひ。

何か耳打ちされるのかと思ったら、あさひは僕の耳に音を立ててキスをした。

ぞわりとする。どうすることもできず、なすがままの僕。

すると頬を撫でていたあさひの掌が、とうとう僕の首筋を伝ってワイシャツの襟の内側をくすぐる。

——もうだめだ。あきらめるしかない。観念した僕はそう悟った。
……その時だった。

ぴたり、とあさひの動きが止まったのだ。まるでビデオを一時停止したときのように。

何事かと思いあさひを見ていると、やがてあさひは身を起こし、僕も元のように座らせられると、身なりを整えられた。

あまりに手早いので、やはりされるがままの僕。

「あ、あさひ？」

僕が問いかけると、厳しい顔をしたあさひが静かに、と言わんばかりに、その可憐な唇に人差し指を立てた。僕がまた何か言おうと口を開こうとしたとき、急に部屋のドアから大きな音がして、驚いた僕は体をびくつかせてしまった。

物音は、どうやらドアを開ける音だったらしい。よっぽど乱暴に開けたんだろう。

「あさひー。ただいま。……ん？」

ドアを開けた人物が、僕を見て不思議そうな顔をする。見覚えのない女の子だった。

他校の……見たところ高校生だろうか、制服を着ている。

あさひに押し倒されたと思ったら、突然出てきた知らない女の子。展開についていけない僕は、ただ瞬きを繰り返した。

第一話 秘密はヒミツ「4」

女の子は、まるでめずらしいもののよう、僕とあさひとを交互に見比べる。

シャンプーの宣伝でもやれそうなほどの、きれいな長い黒髪がその背中で揺れる。

少し切れ長の大きな瞳が、まじまじと僕を映している。

あさひが可愛い系なら、彼女はきれい系か。そこらにはなかなかいない美人である。

あさひとはちょっとタイプが違っけれど、まなざしがどこかあさひに似ているような気がした。

そんなことを考えながら彼女を見てみると、その切れ長の瞳が怪訝な色に変わる。

得体のしれない男に対しての警戒だろうが、思わずその雰囲気を押されそうになる。

少し顔をしかめただけであるが、顔がきれいなだけに迫力があるのだ。

「……誰？ あんた」

女の子が手短にそれだけ告げた。誰と言われても。名前を名乗ればいいのか？

別に、あさひと一緒にいるのだし、そこまで警戒心をあらわにし

なくてもいいんじゃないだろうか。

それはそうとあさひである。彼女の出現によりすっかり忘れていた。

まだ少し緊張の残る気持ちでおそろおそろあさひを見ている。するとそこには、すでにエンジェルスマイルのあさひがいた。

「おかえり！　萌ちゃん^{もえ}。今日は早かったねっ？」

その可憐な唇から、可愛らしく明るい声のトーン。やっぱり可愛い。

まるでさっきまでの出来事は夢のようである。いや、夢だと思いたい。

そんな僕の心情なんて知らないあさひはすくと立ち上がり、満面の笑みでその“萌ちゃん”に駆け寄る。そうして彼女の腕に自分の腕をからめるあさひ。

じゃれて甘える、これまたいつもの猫的あさひである。

「紹介するね！　修ちゃん。この子、私のいところで安藤萌ちゃん。高校一年生だから、私たちのいつこ下だよ。二年くらい前からうちに住んでるんだ」

あさひが満面の笑顔で彼女のことを説明してくれた。なるほど、いところ。道理でどこか似ていたわけだ。

それはいいのだが、紹介された萌ちゃんはにこりもしないので少し気まずかった。

さっきからの態度と言い、まるで愛想がない。

そんな萌ちゃんの態度に、あさひだって気付いているだろうに。
やはりマイペースよろしく空気も読まないあさひは、紹介を続ける。

「それでね、萌ちゃん。この人は沢田修二郎くん。私と同じ学校の、二年生だよ」

「よろしく、萌ちゃん」

一応紹介されたわけだから、僕は立ち上がって笑顔を作り、萌ちゃんに向いてから握手の手を差し出す。けれど萌ちゃんといえば余計に眉をひそめただけであつた。

さし出されたまま行き場のない僕の右手が空しい。やがて萌ちゃんがぼそりと口を開いた。

「……萌“さん”」

「……は？」

彼女の言つた意味がわからず、今度は僕も怪訝な顔で聞き返す。すると彼女はさらに眉をひそめた。完全にむかついた時の表情。

「なれなれしく呼ぶなって言つてんの！ 萌“さん”。わかつた？」

萌“さん”の強制的なまでの問いかけに、思わず僕は考える間もなくうなづく。

握手どころではないので右手はさりげなく引つ込めておいた。迫力がありすぎたのだ。完全に押されぎみの僕である。

「じゃ、あたし今から勉強するから、静かにしててよ？ 修二郎とあさひを二人にするのは気が引けるけど……、大丈夫よね？」

萌さんは僕を牽制するようにひと睨みすると、さっさと部屋を出て行った。

さりげなく呼び捨てにされた。確か、僕が年上じゃなかったか？

初対面の年下の女の子に、まさか呼び捨てで呼ばれる日が来ようとは。

少し疲れた僕は、やれやれと元の場所に戻り、腰掛ける。

なぜあんなにも敵視されないといけないのだろう。

それに牽制する対象を間違っている。牽制するなら、僕でなくあさひのほうだ。

「ごめんね、修ちゃん。萌ちゃんかなりの男嫌いな。男の人を見るとすぐ噛みついちゃって」

僕の横まで戻ってきて座りながら、あさひが困ったように笑った。あさひと萌さん。この二人、キャラが濃すぎである。

……そういえばすっかり忘れていたが、萌さんの出現により助かった僕である。

だがまた二人きりになってしまったではないか。

さつきから色々ありすぎて、もうびくびくするのにも疲れてきた僕であった。

とりあえず、またもおそろおそろ隣のあさひの表情を盗み見てみる。

……よかった。まだいつものエンジェルスマイルである。

あさひがその可憐な唇を開いて、けれどとんでもないことを言った。

「ねえ、修ちゃん。さっきの続きしようか？」
「……えっ!？」

僕が驚いたのは言うまでもない話である。

第一話 秘密はヒミツ〔5〕

さっきの続き、だって？ 悪夢はまだ終わっていないなかったのか。すると完全にびびっている僕を見て、あさひがおかしそうにふき出した。

「あははっ！ うそだよー。照れちゃって、可愛いんだから」

別に照れているわけではない。本能的な危機を察知した、当然の反応である。

そんな僕の内心を知ってか知らずか。

あさひがふと立ち上がり、窓際まで行き窓を開ける。

窓まで行くのにも数歩歩く。やっぱり広い部屋である。

窓の外から、冷たくも熱くもない、心地良い初夏の風が入ってくる。

僕に背中を向けたあさひが、うんと伸びをした。

「ねえ。私たち、別れようか。修ちゃん」

何の前触れもないその言葉に、僕は耳を疑った。

……別れ話、だろうかこれは。

あまりに流れが自然過ぎて、重大なはずのあさひの言葉まで一緒に流してしまいそうだった。

自分から切り出したくせに、あさひは相変わらず窓の外ばかり見て、僕には背中しか見せない。

どうして急にそんなことを。

僕に、秘密を知られたから？

確かにかなり驚きはしたが、僕がそのくらいで嫌いになるとでも思っているのだろうか。

僕は少しむっとした。

あさひは僕の気持ちを軽く見ている。

これでも一年も付き合ってきたのだ。

「僕は別れる気はないよ。あさひ」

あさひの背中に、僕は少し口調を強めて告げた。

あさひは振り向かない。

けれど、ふっと小さく笑いをこぼしたのが聞こえた。

「やっぱり……修ちゃん、よかった」

そう言って、やっと僕を振り向いたあさひが、にこりと笑う。

「大丈夫。別にマイナスな意味じゃないんだ。まだ修ちゃんのこと
は大好き。でも、作られた偽りの私で修ちゃんと付き合うのは、も
う止めにしたいなって」

伏し目がちな瞳に、長いまつげ。愁いを帯びたその表情。

さっきのダークなあさひの笑みよりも、ずっと惹かれた。

押し倒されておいて何だが、あさひの根底の部分は、やっぱり純

粹だと思う。

確かに作っていたかもしれないが、あさひの透明な笑顔が、全くの偽物だとは思えないのだ。

僕の手を離れたあさひが、強気な笑みを浮かべる。

「もう一度、夢中にさせて見せるから。今度は、本当の私を。だからそれまで、彼氏彼女はお休み」

宣言するように。あさひは僕の目をまっすぐに見て、そう告げた。受けて立つと思った。天使のようなあさひも、小悪魔的なあさひも。どちらもある。

あさひの手にかかれば、多分僕はまた、簡単に彼女に夢中になってしまっただろう。

ふと、あさひが思いついたように口を開いた。

「そうそう、修ちゃん。私の秘密、もちろんヒミツにしてくれるでしょ？ でないと……」

意味深に言葉を切ったあさひが、不意打ちとばかり僕の首に両腕を回してきた。

油断していた僕は、至近距離にあるあさひの色気満載の笑みに、またも してやられてしまった。

「めちゃくちゃに、しちゃうかもよ？」

あさひは僕の耳元に唇を寄せ、そつとささやいた。

……僕はこの先、果たして自分の身を守ることができるのだろうか？

ああ。これからの受難の日々を思つと、幸せなようで、哀しいようでもあった。

第一話 秘密はヒミツ〔6〕

初夏とはいっても、もう日は落ちかけていた。

あの後帰ることになった僕を、あさひは玄関先まで見送ってくれた。

けれどじゃあね、とだけ言ったあさひは、そのまま家の中に引込んでしまった。

——“また明日ね、修ちゃん！”

いつもの別れ際のあいさつ。こぼれんばかりの満面の笑顔で。

あさひはいつもそう言っ、決まったように僕の頬にキスをする。

それももう無くなってしまったのか。

別れたのだから当然かもしれないが、なんだか少し寂しくなった。

なんだか少し気落ちしたまま、僕は帰路をとぼとぼと歩く。

とその時、背後から誰かが駆けてくる足音。

「待って！」

振り向くと同時に、すごいボリュームのその声が僕の耳を突き抜ける。

頭に響きそうなほどの大きな声。驚くべきはその声の主である。さっき出逢ったばかりのその人物は、どうやら僕を追ってきたら

しい。

その人物——萌さんは、立ち止まった僕に安心したのか、膝に両手をつけて荒い呼吸を繰り返す。

「どうしたの？」

おそろおそろ、僕は問いかける。よつぽど全速で走ってきたのだろうか。

息を整えるのに夢中な萌さんは、何も答えなかった。

僕があさひの家を出てから少したっているし、それなりの距離を歩いたから、それも当然か。

そのまま、何十秒か経過した後。

やっと落ち着いた様子の萌さんが、視線を僕に向けてきた。

「あさひに……何したの？」

萌さんは前触れも何もなく、食い入るように僕を見つめながら問いかけてきた。

どきりとする。でもやましいことなんて何もないはずだ。

断わっておくが、何かされたのは僕のほうである。未遂だったが。

何も言えない僕に、けれど萌さんはたたみかけるように再び問いかけてきた。

「あさひが変なの。笑ってるのに……なんか、笑ってなかった。ねえ、何したの修二郎」

どうやら萌さんが問いたいののは、僕が思っているようなことではなかったらしい。

気丈に振舞っていたが、やっぱりさすがのあさひも堪^{こた}えていたのか。

別れたばかりなのだし、仕方がないのかもしれないが、少し胸が痛んだ。

「……昔から、男はみんなあさひが好きだったの」

唐突に、萌さんがぽつりと話し始めた。その表情に、小さな陰り。僕に対して話しているというよりも、ただ過去を思い返しているように感じられた。

「あさひに近づくための道具として、利用されたこともあるわ。だから男は大嫌い。でも男はみんなあさひに夢中なの。私なんか相手にされないくらい」

言って、萌さんはあさひに負けず劣らず 長いまつげを伏せた。はつとするような大人びた表情。——やっぱりこの子、すごくきれいだ。

「……まあ、そんなことはどうでもよくて。私が聞きたいのは、あさひのこと」

気を取り直すような言い回しで、萌さんは再び僕をまっすぐに見た。

わざわざ追いかけてきたのだ。よっぱどあさひのことが気がかりだったんだろう。

誠意をもって答えなければと思った。きちんと萌さんに向き直って、僕は口を開いた。

「ごめん。あさひのことについては、今はそれしか言えない」

納得はしてないだろうが、萌さんは小さく、わかった、と返してきた。

あと、これは言うておかなければ。本人はどうでもいいと言っていたが。

さっきの話しぶりからして、多少なりとも心の傷になっているようだと感じたから。

「あのさ、相手にされないなんて事ないよ。萌さんも十分、可愛いと思うよ」

笑みを浮かべながら言うて、萌さんの頭にぽんと手を置いてみる。

驚いたように目を見開いた萌さんは、一瞬ぴたりとその動きを止めた。

しかしすぐに我に返ったように、僕の手をすごい勢いでぱしっと払いのけた。

「な、何すんのよ！ なれなれしくしないでって、言ったでしょ！？」

真っ赤な顔をしているくせに、僕を突っぱねて見せようと躍起になっている萌さん。

思わずこっそり笑ってしまった。やっぱり、大人びていても年下である。

多分さっきの話からしても、男に対する免疫があまりないのだらう。

……さっきあさひに手玉に取られていた僕も、人のことは言えないのだが。

なんて、そんなことを考えていると。

「朝七時十分、安藤家の玄関に集合」

唐突に萌さんがそう宣言するので、飲み込めない僕は萌さんを見返す。

まだ少し頬の赤い萌さんは、ぶっきらぼうにぷいと顔をそむけながら話を続ける。

「物分かり悪いのね。命令してんの。あさひの本物の笑顔を取り戻すまで、必ず朝迎えに来ること。……一分でも遅れたら承知しないから。わかった？ 修二郎」

有無を言わさない、萌さんの強い口調。例にもれず、頷くしかない僕。

あさひと萌さん。正反対のようで似ている二人。

初夏の夕暮れ。あまりに密度の濃い一日に、どっと疲れが押し寄せる。

この二人に振り回される日々を連想して、僕は深いため息をつくのだった。

超
変態的彼女。
第一話
“秘密はヒミツ”
完

第二話 誘惑的彼女。〔1〕

彼女は小悪魔系である。……うん、ちょっと違う。

彼女は天使のようである。……これは過去のこと、もはや事実ではない。

彼女は二重人格である。……うーん、猫を被っていることが二重人格か？

彼女は「変態的」である。

……ああ、やっぱりこれが一番しっくりくる。

完全なる変態ではないが、その素質は十分ということ。よって「変態“的”」。。

——哀しいことである。

超 変態的彼女。 第二話 誘惑的彼女。 〽

重い、重いまぶたの向こう側で、大音量で何かが鳴り響いている。

まぶたの向こう側に、とても重要なことがあった気がする。
しかし今の僕に、そんなことを気にしている余裕はなかった。

そう、この状況である。絶体絶命、危機的状况。
仰向けに横になっている僕、そしてその僕に覆いかぶさっている
のは――

ふと、彼女の手が僕の頬を撫でる。この前、なんとか逃れることが
できたこの事態。

けれど今日という今日はもう助かるすべはない。

「修ちゃん……」

猫なで声で僕を呼び、あさひが魅力たっぷりにはほ笑む。
瞼の向こう側の何かが、警報のように音を大きくして――

「はっ！」

――覚醒。鳴り響く、目覚まし時計の不快な音の中。

沢田修二郎、予定より約二十分遅れての、悪夢からの起床。

……非常に、やばい。

それからの僕の支度の手早さと言ったら、尋常じゃなかった。
約束したばかりなのだ。あさひのいところで、少し――いや、かな
りきつめで、年下なのに年上のような迫力と美貌を兼ね備えた、
“萌さん”と。

――“一分でも遅れたら承知しないから。わかった？ 修二郎”

萌さんの台詞を思い出してぞっとした。
さっそく遅刻なんてしたら、何を言われるかわかったものじゃな

い。

変態的で猫的、元彼女あさひ。冷たい美女萌さん。どちらも顔はいいがキャラが濃い。

あの二人との登校なんて気後れするばかりだったが、僕には従う道しかないのだ。

息を切らしてたどり着いた、安藤家の立派な玄関。

そこには待ち合わせの予定通り、二人の美少女が立っていた。

「遅い！ 修二郎、何やってんの。時間守らない男ってサイテー」

僕を見つけるが早いか、萌さんがきれいな顔をしかめてにらみを利かせる。

さすが、筋金入りの男嫌いということか。これじゃあ男は近寄れないだろう。

外見だけ見れば、かなりモテそうなのに。もったいないばかりだ。

たじろぐ僕に、エンジェルスマイルのあさひがフォローとばかり「おはよう」と言った。

裏があると知ってはいても、やはり長い間慣れ親しんだ笑顔だ。ほっとした僕がおはようと返すと、あさひがその可憐な唇を尖らせた。

「もうっ！ 遅いよ修ちゃんてば。一緒に行く約束したって聞いてたから、私張り切って待ったのに。寝坊しちゃったの？」
「うん、ごめん……」

僕はもごもと言葉を濁した。

寝坊したというか、あさひの夢にうなされていた。

——だなんて、とても言えない。

そんな僕の内心なんか知らないあさひが、男なら誰でも好きになっ
てしまいうな、それはそれは可愛らしい笑みを深める。

「しょうがないなあ、今度から寝坊したら私が迎えに行つてあげる
よ。だけどね……」

そこでいったん言葉を切つて、背伸びしたあさひが、僕の耳元に
顔を寄せる。

何か耳打ちしたい様子だ。何だろうと耳を貸すと、ひっそりとし
た彼女の声がかんでもない言葉を運んできた。

「気を付けたほうがいいよ？ そのうち、寝込みを襲われるかも……

ね？」

「えっ!？」

我を忘れるほどの衝撃を受けた僕は、思わず叫び声を上げた。

今朝の夢が頭にちらつき始める。知らずと背筋に冷や汗が流れた。

「修ちゃん、どしたの？ かたまっちゃって」

マイペースなあさひは何でもなかったかのように、涼しい顔であ
る。

そんなやり取りのさ中に、もう一人の美少女のきつい声が、再び
僕を攻撃した。

「ちょっと！ なに和んでんのよ。修二郎は遅れた罰として、今日
の放課後、おごりね。私パフェ食べたい」

萌さんも、別の意味でとんでもないことを言っていた。

待ち合わせに遅れたくらいでいちいちオゴっていても、僕の財布が持たない。

たじろぐ僕に、あさひがとめとばかり便乗する。

「私も行きたいな、修ちゃん。私、駅前のお店がいいなつ。すっごくおいしいって、評判なんだ」

大きな瞳で僕を見上げながら、僕の服の裾を指先でつまみ、つんと引っ張る。

僕がいつも負けてしまう、可愛すぎるあさひのおねだりであった。

結局、完全に二人のペースに飲まれている。

パフェの話なんかしながら、女の子らしくきやつきやと笑う二人。僕は見つからないようにひっそりと、盛大なため息をつくのだった。

第二話 誘惑的彼女。〔2〕

あさひと萌さんがいということ、とりあえず道中沈黙が訪れることはなかった。

楽しそうに話す二人の美少女の横に並んで、歩く僕。

時折自転車で通り過ぎていく男子高校生が、羨望の眼差しで僕を見てくる。

その視線たちにもう一つ根付いていた感情が、なぜこんな平凡な奴が、という当然の疑問であつた。

それはそうだろう。二人ともなかなか見ない可愛い女の子。そして特別に格好いいというわけではない、普通すぎる僕。けれども通り過ぎていく男子生徒たちは皆、知らないのだ。

この二人のキャラの濃さを。一緒にいるには結構な精神力が必要だ。

萌さんは僕とあさひの高校の近くの、女子高に通っているらしい。ずいぶんと僕たちの学校に近い道の分岐点で、萌さんと別れることになった。

立ち止まった萌さんが腕組みし、僕を見据える。

あさひの前でははっとするほどきれいな顔で笑っているくせに、男の僕の前ではがらりと表情を変える。不機嫌にも見えるその瞳で彼女が僕を見るのは、最早お決まりになりつつあった。

「いい？ 学校が終わったらすぐに迎えに来るのよ。今度遅くなったら——」

「わ、わかった」

彼女に皆まで言わせず、僕は急いでうなづいた。

パフェをおごるといふ約束は、どうやら実行するしかなさそうだが、やはり逆らえないのは、彼女がきれいすぎる故の迫力からに違いない。

断じて僕が弱いからではない。——そうだと信じたい。

僕と萌さんのそんなやり取りを黙って見つめていたあさひであったが、何を思ったのか、ふと萌さんの顔をのぞき込んで口を開いた。

「萌ちゃんってば、変なの！ いつも男の人には絶対に近寄らないのに。どうして会ったばかりの修ちゃんには違うの？」

様子をつかがうような、ゆっくりとした問いかけであった。

萌さんは衝撃を受けたように切れ長のきれいな目を丸くする。

そのまましばし黙って、けれども次の瞬間には慌てふためいたように表情を崩した。

どうやら男嫌いということでの手の話に免疫がないらしい。

萌さんの頬はみるみるうちに赤く染まっていた。

「なっ……、なに言い出すのよ。別に意味なんてないから！ 修二郎って扱いやすいし。へなへなしてて男らしくないし。寧ろ男じゃないし。だから——」

僕の心をずたずたにする残酷な言葉を次々と並べてから、萌さんは言葉に詰まった。

昨日出会ってからというもの、萌さんは例外なく僕を睨みつけている。

確かにあさひの言うことは的外れだと、僕も思った。

萌さんが否定したくなるのも当然だ。だが、何もそこまで言わなくても……。

打ちひしがれた僕になんか構ってもいないあさひは、尚も必死な様子の萌さんに詰め寄りたいたい様子だった。

「だから？ ……だから、好きになりそう？」

さすがの僕も、あさひのその台詞は見過ごせなかった。

一応元彼ということで、あさひは僕を取られるような気持ちになっているのかもしれない。

別れたばかりで過敏になっているのだろう。

けれどもそんな言いがかりをつけられた萌さんが気の毒だった。

あさひは僕を好きになったが、それは例外だ。

美少女で男嫌いな萌さんまでが、僕なんかを好きになるわけがないのだ。

「あさひ。何言ってるの。そんなはずないよ。ねえ、萌さん」

あさひにたしなめるように言ってから、僕は萌さんに同意を求めた。

彼女の切れ長のきれいな瞳と目が合う。すると、もともと大きな目をもっと大きくした萌さんが、また慌てふためいたようにぷいと目を逸らした。

登校途中の道端に三人、突っ立ったままで。朝なのに、不穏な空気が流れていた。

第二話 誘惑的彼女。〔3〕

なぜこんな不穏な空気になっているのか、その理由は見当もつかなかった。

だからどうしたらいいのかもわからない。

萌さんが僕の問いかけにうなづき納得し、話を流して。

そして無事に何事もなかったように、元の空気に戻るはずだったのに。

第一、二人はいとこ同士で仲が良くて、たじろぐ僕はともかくとして、二人にとっては楽しい登校時間になるはずじゃなかったか？

必死に言葉を探しながらも、僕はなにも言えず。

そんな中、しばらくしてからあさひがふと笑いをもらした。

「ふふっ、冗談だよ」

いつものエンジェルスマイル。に、心底ほつとした。

重たかった空気が、華やかなあさひの笑みによって軽くなる。

あさひは昔からその容姿もあって、場の空気がどんなに淀んでいても、微笑みひとつですぐに雰囲気を変えてしまう不思議な魅力があるのだ。僕はそんなところがすごく好きだった。

でも今回の場合は、この不穏な空気を作り出したのも、あさひではあったけれど。

萌さんも何も言わないけれど、やはり僕と同じくほっとしたのか表情を少し崩していた。

けれどもせっかく和らいだ空気の中、あさひが掘り返すように再び口を開いた。

「でもね……、私負けないよ？　いくら相手が萌ちゃんでも、ね」

微笑みの中、あさひはしっかりと萌さんを見つめる。

らしくない態度だと思った。確かにあさひはマイペースだ。

けれども必要なときには空気を読み、うまくその場を取り持つてしまうのに。

どう返していいかわからないのか、あさひの視線を受けた萌さんがきゅつと唇を引き結ぶ。

彼女もまた、らしくないような気がした。

眉間にしわを寄せ、誰がこんなやつ、なんて吐き捨てそうなものなのに。

けれども僕は別に、会ったばかりの萌さんのことをよく知っているわけじゃないのだが。

またも流れ始めようとする不穏な空気を破ったのは、今度はあさひではなく第三者の声だった。

「あさひ、おはよー」

僕たちの後ろから何気なくかけられた、女生徒らしきその声に振り向く。

どうやらあさひと仲のいい、あさひのクラスメイトだ。見たこと

がある。

彼女はあさひと話したいような様子だったが、僕と萌さんを見て遠慮したのか、そのまま通り過ぎていく。

そんな様子をひとしきり観察してから、あさひが思いついたように言った。

「私、先に行ってるね。萌ちゃん、修ちゃん。また帰りにね」

そう言っただけで萌さんと僕ににっこりと笑いかけたかと思うと、口をはさむ暇も与えずにあさひは駆けて行った。すぐに先ほどの女生徒に追いつき、楽しげなあさひの背中が遠ざかっていく。けれども彼女のふわふわとした茶色髪だけは、僕の目に、どこかさみしげに映っていた。

取り残されて呆然とする僕。それは萌さんも同じだったみたいで、ふと僕と視線が合って、萌さんもようやくそこで我に返ったようだった。

「かつ、勘違いしないでくれる!? 私、あんたのことなんて! そもそもあんたのこと、何も知らないし!」

先ほどあさひの前では調子を失っていただけだったのか。僕が最も萌さん“らしい”と思う不機嫌な表情で、語尾を強くして。

けれども頬は赤くしながら、萌さんがぶいと視線を逸らす。強がっても年下とばかり、男に免疫がなくて。

いつものペースを取り戻した萌さんにどこかほっとしながらも、僕は萌さんに笑いかけた。

「わかってるよ。あさひのためなんだよね」

そうなのだ。萌さんが僕と登校をしたがったきっかけ。
一緒に登校しているのも、“あさひの本物の笑顔を取り戻す”ため。

目的はそれだけ。それ以上も以下もないのは、僕も当然のごとく承知している。

僕は自分をわきまえている。勘違い男になることはない。

あさひに詰め寄せられた萌さんが何も言えなかったのは、まさかあさひのために僕に近づき、僕と登校しているなんて言えなかったのだろう。

けれども、僕が勘違いをしているわけではないことを伝えたというのに。

萌さんは、何故か複雑な表情をして言葉に詰まった。

「……っ、そうよ。……わかってるならいいの」

大きな瞳に、繊細で長いまつげを伏せて。萌さんがぼつりと漏らす。

さらりとしたその黒髪を細い指先で耳にかけながら、萌さんは僕に背を向けてしまった。

会ったばかりだからかもしれないが、萌さんのことがよくわからなかった。

「なによ……、昨日あんなこと言っというて。どうせあんたも、あさひが好きなんでしょ……」

とても小さい萌さんのその声は、かろうじて聞き取れるくらいであつた。

彼女の言いたいことがよくわからなくて、僕は「え、」と聞き返す。

萌さんは何も答えない。思い当たることは無くて、僕は考え込んだ。

さっぱりわからない。あんなことを言つた、とは一体何のことだろうか。

昨日、初対面の萌さんに僕は何かまずいことを言つただろうか？

もう一度聞き返そうと思つたその時、けれども僕が口を開くよりも先に、今度は萌さんまでもが駆け出して行つてしまった。

すらりと細い足に、見慣れない他校の制服のスカートを揺らしてその背中まで届いたきれいな黒髪が、彼女の動きに合わせてなびいていた。

遠ざかる萌さんと、最早姿も見えないあさひ。

一人取り残されたまま、僕は戸惑うしかなかった。

第二話 誘惑的彼女。〔4〕

あさひと萌さんと登校してみたはいいものの、結局いつものごとく一人で校舎に入った僕は、やや急ぎ足で自分の教室に向かっていった。

今朝は寝坊してしまったから、ぎりぎりの到着だ。

友人数人と挨拶を交わし、急いで鞆の中身を片付け席に座る。

この間の席替えのくじ引きで、運悪く当たってしまった、一番前のこの席。

それでもホームルームの担任の話なんて聞き流す気満々の僕である。

今朝の萌さんの言葉の裏を、もう一度よく考えてみようと思っていた。

やはり心当たりがないのだが、僕は知らないうちに萌さんを傷つけるようなことを言ったのかもしれない。

しばらくしてからいつものごとく、教室のドアがスライドした。

退屈なホームルームの始まりだ。

ドアの向こう側から姿を現したのは、いつもの中年男性の担任——ではなく、珍しいことに、今日は年若く新人の女性副担任だった。

彼女の姿を認識した生徒たちが、一気にしんと静まり返る。

国語担当、教師一年目の春名実希子先生。
男子生徒たちの話題には、いつも彼女が出現する。

高校生と言っても違和感のないほど、可愛らしすぎる童顔。
きつちりスーツを着ても、着られてしまっている感が否めない。
きつと制服を着て生徒に紛れ込んだら、彼女が教師だなんて誰も
気が付かないだろう。

けれども彼女が男子生徒たちの話題に登場するのには、童顔以外
にもう一つ理由があった。

「おはよう。……今日は担任の鈴木先生がいらっしゃらないから……
…、私がホームルームをします」

必要以上に張りつめたような表情で、春名先生は教卓の前に立つ
た。

教室は、不自然なほどしんと静まり返ったまま。
こわばった表情で順番に名前を呼び、春名先生は出欠を確認する。
こちらまで緊張してしまいそうなたどしい声であった。
何かの均衡をぎりぎりで保っているような教室の空気の中、つい
に春名先生は一番呼びたくなかったであろう生徒の名を、ためらい
がちに口にした。

「佐藤くん。……佐藤誠司くん」

佐藤。いつも教室の中心でふざけて、教師に服装やらなんやらを
よく注意されている男子生徒だ。

そしてこの男子生徒はいつも、春名先生に固執していた。

それは、今日も例外ではなかったようで。
にやにやとして立ち上がった佐藤が、ついに発言した。

「春名センサー、そろそろ薄着したらどうですか？ そんなに着込んでちゃ、暑苦しいし」

ここまで生徒は皆返事するだけで黙っていたというのに、その一言をきっかけにしたように、男子生徒のほぼ全員が一気に色めき立つ。

女生徒たちとは言えば、やだー、なんて言っているだけだ。
ひそひそと笑ったり顔をしかめながらも、止めることもない。
保たれていた教室の均衡はあっけなく崩れ落ちた。

教卓の前に立ち尽くしたような春名先生は、泣きそうな目をして唇を引き結ぶ。

春名先生が男子生徒たちの話題に登場する理由。
それは彼女の体型にある。要は、『巨乳』なのだ。

童顔と対照的なその体型は、彼女にそのつもりがなくても男を引き付ける。

彼女もそれをわかっていて厚着したり、必死にかくそうとしているのだが、思春期真っ只中の男子生徒たちはごまかせない。

春名先生ももう少し強気にきっぱりと怒って見せればいいのだが。
小柄で可愛らしく、大人しそうな彼女には無理な話のようである。
それが生徒たちの態度を助長させている。

けれども無力な彼女を追い詰める生徒たちの態度は、教師いじめ

にも似ていた。

それを好ましく無いと思っていながら、僕には何もできない。
目立つタイプではない僕にとって、教卓はあまりにも遠すぎた。
まさに必死と言わんばかりに出欠の確認を終わらせて、春名先生
は急いで教卓の上の書類を整える。

「それじゃ、ホームルームを終わりにします」

言いながら、彼女の足はすでに教室から逃げ出し始めていた。
余程慌てていたのか、彼女のいなくなった教卓の上に書類が忘れ
られている。
ざわざわと騒がしくなった教室の中、そんなことを気に留める生
徒はいない。

一番前の席で、教卓にも近い僕である。

つまり、これを届けることができるのも僕だけである。

使命感に駆られた僕は、忘れ物の書類を手に取り廊下に出た。

しょぼくれたように歩いていく小柄な背中を、すぐに見つける。

「春名先生」

名前を呼ぶと、びっくりと肩を揺らした先生の髪が揺れて、光を受
け流す。

肩のあたりで切りそろえられ、さらりと自然な色をしたボブ。
その髪型は、小動物的な春名先生を可愛らしく見せていた。

先生は、生徒全員が佐藤のようなやつだと恐れているのかもしれ

ない。

立ち止まったまま固まったように動かない背中に、僕はすぐに追いついた。

第二話 誘惑的彼女。〔4〕（後書き）

今日はもう一話更新予定です。

ぜひ、見に来てくださいね！

第二話 誘惑的彼女。〔5〕

僕が近くまで来たところでようやく、年上でも少女のように黒目がちでつばらな瞳が、そろそろと僕を振り返る。

「これ、忘れ物です」

僕を認識した先生は、差し出された書類を見て。
意外なものでも見たように、丸く大きな目を数回瞬かせる。

続いて、萌さんほど長くはないがきれいにカールした細いまつ毛を上げて、春名先生はほっとしたように微笑んだ。

春名先生は笑う時、その頼りなげな瞳で懸命に笑む。

八重歯をのぞかせ愛くるしく笑うあさひ。

はっとするほどきれいに微笑む萌さん。

そんなふたりとはまた違って、春名先生のやんわりとした笑顔は、庇護欲をくすぐられるような可愛らしさがあつた。

年上のはずなのに幼くも錯覚してしまいそんなその魅力。

結局は佐藤も、先生に惹かれていただけなのだろう。

「ありがとう。沢田君だけはいつも、優しいよね……」

「いえ、そんなことは……ないです」

書類を渡しながらも、気まずさに僕は目を伏せる。

男子生徒たちを止めてやれば格好良いのかもしれない。

だけど僕はあくまでも「普通」の生徒の一員に過ぎない。目立たない僕には、そんなことをする勇気も度胸もなかった。だからこうして先生に感謝される理由なんてないのだ。

その場に短い沈黙が訪れた、その時。ふと廊下の向こう側から、

「修ちゃん！」

と、大きな声がはずんで僕を呼んだ。

視線をやってみると、そこにはあさひが。

ずいぶんと遠いのに、僕に気が付いたのだろうか。

一限目の始まりはもうすぐだ。今から体育らしく、体操着のあさひは今朝のクラスメイトの女の子と一緒にあった。

こぼれそうなほどに満面の笑顔で、あさひは僕に手を振っている。僕を見つけたのがよほどうれしかったのだろうか。

遠くの僕にアピールするように、時折りよこびよこと飛び跳ねたりしては、照れたように はにかんで。

体育のために束ねたのか、頭のでっぺんのポニーテールが、あさひ本人と同じに元気に揺れていた。

遠目でも、あさひはそれはそれは可憐だった。

体操着の短パンからのびる、『美脚』と評判のすらりとした細い足。

細いだけじゃなく女らしくもある、抜群のスタイル。

その上、アイドルのような目を引く容姿だ。付き合っているとき

は、クラスの男たちから羨まれたものである。

体操着すらも着こなす、やはりあさひは『可愛い系』を代表する美少女だ。

「彼女なんでしょう？ 噂、聞いてるよ。沢田君には、ぴったりだね」

遠慮がちに、先生がぼつりとぼした。

あさひから先生に視線を戻してみると、なぜか切ないまなざしで、先生はぼんやりとあさひのいる方向を見ていた。

ぴったりなんて、お世辞だろうか？

普通の僕と美少女あさひ。釣り合わないのは周知の事実だ。

もしかしたら先生も美少女の部類に入るので、その辺は鈍感なのかもしれない。

あさひとはまたタイプの違う、『小動物系』を代表する、美女という年齢なのに美少女。

一瞬、別れたことを教えようかと思った。

けれどもそんなことを聞かされたところで、先生も気まずくて困るだけだろう。

あさひは疲れを知らないのか、まだ全力で僕に向かって手を振っていた。

やがてしびれを切らした様子のクラスメイトの女の子に、引きずられるようにしてあさひは連れて行かれてしまった。

見えなくなるあさひの姿。僕も教室に戻らなければ。

「戻りますね。もうすぐ一限目が始まるので」

春名先生にそう言って、元来た道を戻ることにした。けれども背後の先生は、どうやら動く気配もなく。

背中に視線を感じるような気がして、数歩歩いたところで僕は振り返る。

すぐに、つぶらな瞳と目が合った。

「……春名先生？」

職員室にも戻らず突っ立ったままの先生に、僕は怪訝に問いかける。

と、はっとしたような先生は、その表情に焦りをにじませた。

確かな年齢は知らないが、新卒らしいのでおそらく二十代前半。年の割に純粹すぎる彼女は、わかりやすすぎると常々思う。

「書類、ありがとう」

急いでそれだけ言ってから、春名先生がようやく僕に背を向けた。今朝のあさひや萌さんのように駆けて行くわけではなく、あくまで廊下を静かに歩いて。

年の離れた『大人』のはずで、けれどもどこか頼りないその背中をしばし見送ってから、僕も教室に戻った。

第二話 誘惑的彼女。〔6〕

平凡な一日はあっという間に過ぎていき、放課後を迎えることになった。

けれども今日の放課後は平凡には過ぎてくれないだろう。約束が待っているのだ。今朝、萌さんの様子はおかしかったけれど。

だからこそ気になっていた。とりあえず約束は守るべきだ。

急いで鞆の中に荷物を詰めていたその時、教室の入り口から室内を観察しているつぶらな瞳を発見した。

春名先生。あまりこの教室を訪れることはないのに、どうしたのだろうか。

少し困ったようなまなざしをついに伏せて、先生は廊下に引っ込んだ。

とりあえず帰りの支度は中断して、僕は廊下に出る。

ちらほらと帰っていく生徒たちに紛れた、スーツの小柄な背中。

「どうしたんですか？」

しよぼくれた背中に声をかけるのは本日二度目だ。今度は声で僕だと認識したのか、春名先生はスムーズに振り返った。

「体育倉庫の戸締り当番の子が、見つからないの。どうも帰っちゃったみたいで。でも別に、私が行けばいい話だしね」

倉庫のらしい鍵を指先で揺らしながら、先生が気丈に笑った。

懸命な笑顔は、無理しているのが見通せるようで。

なんだかかわいそうになってしまい、僕は無意識のうちに口を開いていた。

「僕が行ってきますよ。先生、忙しいでしょう」

僕の申し入れに驚いたのか、先生が丸い目をさらに丸くする。そして気まずそうに目を伏せ、ためらいの表情を見せた。

「でも……」

さすがによろしくとは言いにくらしく、先生の声が迷うように揺れる。

けれども生徒たちのいじめを見守ることしかできない僕に、できることはそれくらいしかないのだ。

黙っている先生の手から、半ば強引に鍵を奪う。

と、先生の頼りない瞳が迷いを帯びたまま僕を見た。

戸締りくらいならすぐに終わるだろうし、萌さんとの約束に支障はないだろう。

そんなやり取りを終えたその時、彼女は唐突にやってきた。

背中 of 小さな衝撃とともに、僕は少し前のめりになる。

「修ちゃんってば！　また春名先生とふたりで、何話してるの？」

その台詞は、すでに僕の背中に抱きついた状態の彼女の口から出たものだ。

僕の、『変態的』元彼女。可憐なあさひの登場である。
いつも恥じらいを見せるのに、今日は珍しい登場の仕方だと思った。

あさひは今まで、人前で僕に抱きついたことなんてないのだが。

ポニーテールはやはり体育の時だけだったらしく、今は下ろされた茶色髪の毛先が首のあたりにあたってくすぐったい。背後から僕の背中に すり寄るようにしてじゃれつくあさひは、やはり猫的だ。

「あさひ。人が見るから」

少しだけ強い口調で制すると、あさひは素直に僕から離れた。そして僕をじっと見上げて、僕の制服の裾を指先でつんと引く。あさひのよくやるくせだ。そして僕が最も弱い仕草でもある。

「ごめんね？ 修ちゃん。つい……」

あさひの控えめな声が、可愛らしく耳をくすぐる。

少しの恥じらいを混ぜた表情で はにかまれては、何度でも騙されてしまうのだ。

そんな僕たちのやり取りを黙って見つめていた先生だったが。
やがて、小動物的な瞳を伏せて、呟くように口を開いた。

「ごめんなさい、私、邪魔だね。彼女との時間、邪魔しちゃ悪いよね……」

「彼女じゃないです。別れたんですよ？」

僕に向けられていたはずの先生の言葉を、さらりと否定するあさひ。

さすがはマイペースなあさひである。自分の事情を隠しもしない驚いた様子の先生にも構わず、やや目を伏せたあさひが続ける。

「だけど頑張ってるんです。……もう一度、振り向いてもらいたいなって」

しみりとしたあさひの声と同時に、雰囲気までもしみりとしたものに変わる。

少しためらいがちにも聞こえる、控えめな言い方だった。

作っているわけじゃなく、まぎれもないあさひの本心なのだろう。先生と一緒にしみりとした後、気遣うようにそつとあさひの肩に手を置いた。

やはり教師である。生徒の弱った心には敏感なのだ。

「そつ……、大丈夫よ。安藤さんなら、絶対。とっても可愛いもの。……ね、沢田君」

突然話を振られて、僕は慌てふためいた。

一応、張本人であるので、どんな表情をしていいかわからなかった僕である。

ここで悪びれもなく僕に振るなんて、まるで空気を読めていない。春名先生は天然なのだろうか？

結局、そのあと数分、あさひと先生は話していた。

今朝もそうだったが、女の子同士の会話に男はなかなか入り込めない。

そんな中、校内放送で春名先生が呼び出されてしまい、結局体育倉庫の戸締りは僕が請け負うことに。

ついてくると言ってきかないあさひと一緒に、僕は体育倉庫に向かった。

第二話 誘惑的彼女。〔6〕（後書き）

次話はR15です。次話投稿時、R15に変更します。

閲覧の際は、十分お気を付けくださいませ。

第二話 誘惑的彼女。〔7〕

校舎裏の体育倉庫は、校舎から結構な距離がある。

とりあえず帰りの準備を済ませてから、僕はあさひを連れて倉庫に向かっていた。

施錠を済ませてから職員室に鍵を返し、そのまま帰れるようにするためだ。

萌さんと待ち合わせなのだし、もう遅れるわけにはいかない。

隣で他愛のない雑談をしているあさひの話を聞き流しながら、たどり着いた倉庫。

この学校に体育倉庫は二つあり、こちらの倉庫は部活でもあまり使われない。

放課後にはだれも居ないはずだったが、けれども僕は倉庫の前に人影を見つけ出した。

「……佐藤？」

訝しむように僕が呟いたその時、向こうも僕に気が付いたようだった。

春名先生に固執していて、今朝のホームルームでも余計なことを言っていたあいつだ。

佐藤は、最高に機嫌の悪い視線で僕を見ていた。

僕のクラスの男子生徒は皆、仲が良い。

僕も当たり障りなく全員と仲よくしているが、佐藤だけは例外だ。僕だけが春名先生のいじめに加担しないことが不満なようで、佐藤は常に、僕を目の敵にしているのだ。

「お前を待ってたんだ、沢田。……春名ちゃんのお願ひ、聞いてあげたんだろ？」

人を不快にするような皮肉な笑みを浮かべ、佐藤が僕を睨む。おそらく廊下での春名先生とのやり取りを聞いていて、嫉妬したのだろう。

悔しいのなら自分が助けてやればいいのに。

絡まれるのに慣れた僕は、いつものごとく無視することに決めた。けれども何も言わず戸締りを済ませようとする僕の態度が不満だったのか。顔をゆがめた佐藤が、僕の手から力ギをひったくった。

太刀打ちする暇もなかった。スリのように鮮やかな手際だったのだ。

続いて佐藤は、まだ扉の半開きだった倉庫の中に僕を強く突き飛ばす。

油断していた僕は、あっけなく倉庫の中に押しやられて尻餅をついてしまった。

「修ちゃん！ 大丈夫？」

焦ったように僕を呼んだあさひが、一緒に倉庫の中に飛び込む。ほこりっぱくて薄暗い、狭い倉庫の中は不快そのものだ。

「ここ、あんまり人來ないし。このまま閉めれば、朝までずっと閉じ込められたままかもな」

ふんと笑い、まるで宣告のように冷たい声で佐藤は吐き捨てた。続いて、重たい音を立てて体育倉庫のドアが閉ざされる。

間髪入れず鍵を閉める音が響き、そこで僕は最悪な事態を悟った。

倉庫のカギは、内側からは開かないのだ。

つまり僕とあさひは、倉庫に閉じ込められてしまった。

小さな小窓しかないので、そこから細い光が入ってくる意外、ずいぶんと暗い。

急いで立ち上がり扉に手をかけてみても、やはり開かなかった。

扉の向こう側からは物音一つしない。

佐藤はもう行ってしまったのだろう。

どうしたものかと僕は考えこんだ。

「閉じ込められちゃったみたいだね」

切羽詰まった僕と対照的なあさひが、けろりとした声音で言った。

普通の女の子なら怖がりそうなものだけれど。

さすがはあさひ。マイペースなものである。

けれどもこんなほこりっぽい倉庫に閉じ込められ、あさひを巻き込んだことが申し訳なかった。佐藤とあさひは全く関係がないのだ。僕はあさひを見て口を開く。

「ごめんあさひ、こんなことに……」

「うっん、私は全然いいよ。修ちゃんと一緒にだし、それに……」

そこでいったん言葉を切って、あさひがそつと僕を見上げる。
狭い暗闇の中で、あさひのまなざしが神秘的にも見えて、心が騒ぐ。

「こんな展開、……ちよつとドキドキしちゃうよね？」

くすつと小さく笑い、あさひが例のダークな表情を浮かべた。
二人になったことで、あさひの秘められた『変態的』な部分が目を覚ましてしまったようだ。

瞬時に呼び起される、今朝の夢。
冷や汗が僕の背中を伝っていく。

そんな僕の内心になんか構ってもいない様子のあさひが、マイペースに話を続ける。

「修ちゃんが春名先生と話してるとね、面白くないんだ。だって完全に負けてるんだもん。……だけど私だってこれでも、四つのうちの上から二番目なんだよ」

なぜここで春名先生が出てくるのか？

やきもちという意味かもしれないが、やけに遠回しな言い方だ。
あさひの言いたいことは、唐突なうえ意味深でよくわからなかった。

相槌も打たずに黙って聞いているしかない僕の手を、あさひがそつと取る。

「ねえ、修ちゃん。……触ってみる？　ちよつと恥ずかしいけど、修ちゃんなら——」

遠慮がちに告げたあさひは、衝撃的なことに僕の手を——なんと自分の胸に押し付けた。

驚きのあまり体をこわばらせ、固まる僕。手は持っていかれたままだ。

掌からダイレクトに伝わってくる、やわらかなあたたかさにとく戸惑う。

ほこりっぱい倉庫の暗闇と、親密な部屋の狭さに、煽られるようだ。

ほのかに赤く染まった頬をして、あさひがじつと僕を見つめる。

少し潤んでいるようにも見える、透明な瞳。早鐘のような僕の鼓動。

暗闇でおぼつかない視界には、あさひしかない。

動揺のあまり、頭の中が真っ白になる感覚だった。

無意識のうちに、掌に全神経を集中させてしまう。

あさひと付き合っているときは大切にすぎで、手を出す勇氣もなくて、キス一つすらできなかった。

「ねえ……別れても、私は修ちゃんのものだよ……？」

あさひの声がひどく妖艶な響きを帯びていて、びくりとした僕は、思わず押し付けられた手を動かしてしまった。

一瞬反応を示してから、あさひは僕を見て微笑んだ。

僕の手の動きに抵抗することなく、触れられるままに形を変える。
あさひはあまりにもやわらかな『女の子』で、それを実感してしま
うと、ざわりとした強い感情が走る。

一年以上付き合っても、決して手を出さなかったのに。
人よりも強いはずだった僕の理性は、今や姿を消しかけていた。

超 変態的彼女。 第二話 “誘惑的彼女。” 完

第三話　Desire～あさひの場合～〔1〕

状況に負けたとか、雰囲気酔ったとか。

そんなのは全部、ただの言い訳でしかないんだ。
だってこの想いは、ずっと私の根底に眠っていたものだから。

「ねえ、呼んでみて」

戸惑いを含んだ眼差しで、修ちゃんが私を見た。
大好きなその瞳を、私はじっと見つめる。

「あさひって、呼んでみて？　ほら、修ちゃん……」

そうやって促してみても、修ちゃんはまだ戸惑っているみたいだった。

私が近づくと、修ちゃんが後ずさって。

それを繰り返し、ついに背中では壁を見つけた修ちゃんが、それでも逃れようとするかのように座り込む。足元にあったマットが、二人分の体重を受けてほこりを舞い上げた。

あくまで逃げ腰のその姿勢は、やっぱり面白くないから。
胸の上で強引に押しとどめた手は、放してあげない。
だって私、触れていたいから。……触れられていたいから。

壁に背中をつけたまま座っている修ちゃんの、傍らに片手をついて。

「修ちゃんと……ひとつになりたい」

私のその台詞を合図に、修ちゃんが大きく身じろぎした。

その声で、優しく名前を呼んでほしい。

名前を呼ばれると、心も体も全部、溶けちゃいそうになるから。

超 変態的彼女。 第三話 D e s i r e あさひの場合

「……あさひ」

私に視線を丸ごと奪われながら、修ちゃんがためらいがちに、私の名前を呼んでくれた。

好きだつて、私の全身が訴えて。

強い想いがこみ上げるまま、修ちゃんにさらに近づく。

これ以上遠ざかれない修ちゃんは、ただ私を見つめていた。

修ちゃんの身長は、私よりもちょっと高い。

いつもは私が見上げてるんだけど、修ちゃんに覆いかぶさるような姿勢の今は、ちよつと私の視線が上。それが新鮮でドキドキする。

光の少ない、二人きりの倉庫の中で。

暗闇の中 浮かび上がるふたつの吐息が、重なる。

本当は、ずっとキスをしてほしかった。

だけど修ちゃんには優しすぎるのか、何もしてくれなくて。付き合っても、それがもどかしかったんだ。

片手で修ちゃんの手を胸に捕まえたまま、もう片方の手で修ちゃんの髪に触れる。

驚いたのか、また身じろぎする修ちゃん。

キスしたい、って思うのと、行動するのはほぼ同時のこと。

修ちゃんは、もう逃げるそぶりは見せなかった。

だけど唇が触れ合おうとした——その瞬間。

——“お前には失望したよ、あさひ”

唐突に蘇ったその声は、記憶の中にあっても鮮明な響きで、強く私の脳裏にこだました。

思わずびくりとした私は、動きを止める。

しばらく呆然と私を見てた修ちゃんが、私を探るような目線にかえた。

「あさひ……？」

遠慮がちに私を呼ぶその声には、心配の色が含まれている。

修ちゃんは、私の心の揺れをすぐに察知してしまったらしい。

暗闇に紛れて、気づかれないと思ったのに。

表情を保てなくなってしまうと、私は思わず顔をゆがめた。

「修ちゃん。私……」

切羽詰まったようにそれだけ言って、私は言葉に詰まった。捕まえたままだった修ちゃんの手を、無意識のうちに強く握りしめる。

好き。——あの日から、ずっと。

だから時折怖くなる。セーブをかけて、自分を隠して。自分を押し込めてしまいたくなる。

そうやって、卑怯な付き合い方をしてきたの。

猫をかぶって、可愛い自分を演じて。安全な付き合い方で。

それで守ってたんだ。大好きな修ちゃんの近くに居られる、カノジョという条件を。

——“どうして、僕と付き合いおうなんて言ったの？”

言葉を濁して誤魔化し続けてたのは、弱い私のせい。

修ちゃんは知らないこと。……出会った日は、私だけが認識してた。

第三話 Desire あさひの場合〔2〕

思い返したくない記憶。忘れたい思い出。
中学三年生の時。――付き合ってる人が、いた。

「好きになるってことは、イコール抱きしめたいってことだと思わない？」

それは恋の話をする時、決まって持ち出す私の持論だった。

みんな受験生、でも昼休みくらいは受験より恋の話。

いつものように、数人の女子グループでお弁当を囲んで。

みんながきょとんとして私を見守っている中、私はマイペースに話を続ける。

「抱きしめてキスして、全部知りたいって」

「あさひ、それってちょっと変だよ。女がそういう所出すと、男は引くの。男って、純粋な女が好きなんだから」

すかさず、私と特に仲が良かった梨子ちゃんが、苦笑いをして言った。

するとみんな梨子ちゃんに同意したようで、今度はその横にいた

なっちゃんが「そうそう」と頷きながら、神妙な顔で私を指差す。

「特にあさひ、あんたは駄目よ。男たちは、可愛いあんたに夢を抱いてるの。見た目通りにピュアな、純粋な女の子であってほしい、って」

それは、決め台詞のように的確なインパクトを持って、私の心の中に沈んでいった。

みんながだよー、なんて同意して笑う中、

「確かにー。あさひがそうじゃなかったら、私たちだってがっかりするもん」

と、誰かが言った。そのままその話は流れていって、話題が変わって。

にぎやかで楽しい昼休みが終わっても、ずっとちくちくと残る、胸の中の違和感。

「……でも私、そんな子じゃないのにな」

ひとりぼつんとつぶやいた言葉は、誰の耳にも届かなかった。

私、そんな子じゃない。夢を抱いてるなんて、そんなの勝手だ。

エッチなことにだって、興味あるし。

相手が好きな人なら、ためらいなくしてみたって思うし。

純粹って、何？ 女だったら、そうじゃなきゃいけない決まりなの？

心の中、いつもそんな疑問を抱えて。

あの時の私はまだ、何もわかってなかったんだ。

当時の私は、彼氏だった高校生の佐川先輩に夢中だった。

萌ちゃんの友達の、お兄さんってことで知り合っ

卒業式の日

に告白されて、付き合うことになった私の初めての彼氏。

いつものように、帰りに先輩の家に寄っていたその日、だけどいつも通り私にキスをする先輩の様子が、ちょっと違った。

首筋に降りてくる、先輩の熱い唇。

何をされるのかわかったし、特に戸惑いもなかった。

私のはじめてが先輩とつてことが、寧ろ嬉しくて。

すると私が普通にしていたのが不思議だったのか、顔を離れた先輩が訝しむような顔をする。

「怖くないの？ あさひ。俺、お前を抱こうとしてるんだけど」

はっとした私の脳裏に響く、なっちゃんの声。

—— “特にあさひ、あんたは駄目よ”

…… そんなことない。きつとそんなことない。

何度も自分に言い聞かせて、私は迷いを振り切った。

きつと怖がつて見せたり、恥じらいを見せたり、私はそうするべきだってみんな思ってたんだ。可愛い可愛い、いつも受身な理想の女の子でいるべきだって。だけどそんなの違う。ぶりっ子するより、自然体でいる方がずっと素敵はず。

「全然怖くないよ。私、先輩が好きだから。先輩のこと、知りたいな」

にっこりと笑って、私は本心を告げる。

先輩は面食らったような顔をしたけど、何も言わなかった。

先輩が私の制服を脱がそうとするから、抵抗を示さず協力する。積極的すぎかなと思いつつも、ためらいなく先輩を抱きしめて満たされた気持ちで、私は先輩を見上げた。

瞬間、どきりと冷たく高鳴る鼓動。

いつも優しい瞳で、私を見つめていてくれた先輩。

だけど今、先輩は信じられないほど冷たい瞳で私を見下ろしている。

「へえ……お前ってそんな女だったんだ。お前のこと純粋な奴だと思ってたのにな」

その瞳と同じに冷たい声には、優しさのかけらも見えなくて。

「お前には失望したよ、あさひ」

先輩のその台詞は、私の心に深く突き刺さった。

まるで頭を強く殴られたような衝撃に、私はただ言葉を失う。

今まで優しいと思っていた人は、ひどく意地の悪い目をして微笑み、私の頬に手を当てた。

「そんな顔をするなよ。ここまできたんだ。遊び相手くらいにはしてやるって」

かっとした私の手のひらが、思わず先輩の頬を打っていた。

そのまま乱暴に服を着なおして、鞆をひったくるようにつかんで

部屋を飛び出す。

靴のかかとを踏んだまま家を出て、道をしばらく走って。
息が上がってきたところに振り向くと、——先輩は追ってきていなかった。

——「純粹って、何？ 女だったら、そうじゃなきゃいけない決まりなの？」

心の中に渦巻いてた疑問が、鋭い痛みが変わって。
一切の表情を放棄して、立ち尽くしたまま、こぼれ落ちていく涙をただ呆然と放置する。

——「男たちはあんたに、夢を抱いてるの」

その瞬間、私はやっと思い知った。

ああ……そうなんだ。そういうことなんだ。
私のままではいられない。私は、私だから。こんな外見だから。
だから、みんなのイメージ通りでいなくちゃいけない。そう演じなきゃいけない。

私はそのままじゃ、誰にも好きになってももらえないんだ。

そのまま走り去る自分の心が、ひどく冷めていくのを感じて。
もう誰も好きにならないって、私は固く決心していた。——あの、
繊細で優しい笑顔を見つけてしまう日まで。

第三話 Desire あさひの場合〔3〕

高校に入学したら、すぐに数人の人に告白された。

先輩や同年の人。だけどみんな全く知らない人とか、顔を見たことある程度の人で。慣れた作業みたいに、私はその都度作り笑顔で断った。告白されたって全然嬉しくなかった。だって私は知ってたから。その人たちはみんな、私の幻想を見てるってこと。

断って傷つける回数だけが増えて、寧ろ後味が悪い。

昨日断った人は、律儀に気にしないでなんて苦笑いしてくれて、それが逆に痛くて。

「昨日また告白されたんだって？ 中学の時以上じゃない。これで何人目ー？」

朝出会うが早いか、朝の挨拶もそっちのけのなっちゃんが、指折りしながら浮かれた声で数えている。中学の仲良しグループの中で、なっちゃんだけが同じ高校に入学した。その上同じクラス。

「さすが、あさひは違うね。噂になってるみたいだしね、可愛い子が入ってきたって。うらやましいな」

にっこりと微笑むなっちゃんは、いつもそんなことを言う。

そんななっちゃんに、曖昧に微笑み返すしかない私。

するとなっちゃんが、何気なく核心に触れた。

「でもどうして誰とも付き合わないの？ もしかしてまだ、先輩の

こと——」

「違うよ、私って理想高いんだから」

触れられたくない話題をすばやく逸らし、とっさに切り返す。
冗談めかして笑うと、なっちゃんもまた「なんて言っておかし
そうに笑った。

……私が可愛いなんて、そんなただのまやかしなんだ。

私にしてみれば、なっちゃんの方がよっぽどうらやましかった。

適度に可愛くて、適度にさばさばして、男友達とも気さくで。
常に先入観だけが先行してしまう、損な私とは大違い。
きつとなっちゃんなら、『普通の恋愛』ができるんだろうな。

いつもそんなことを考える、後ろ向きで可愛くない私。
何気ない毎日が過ぎていく中、出会いは唐突にやってきた。

5月。……あれは、一年生の文化祭の当日だった。

「ちょっと、あさひのためにやってるようなものなんだよ、メイド
喫茶。この文化祭の目玉だって、男たちが騒いでたんだから」

私にそう言ったのは、同じクラス、学級委員の藤木さん。

腰に手を当てて顔をしかめながら、私を半ば睨みつけている。

眼鏡の向こう側の強気な瞳は、彼女の気の強さを物語っていた。

この数週間ずっと同じことを言われ続けては断り、そのやり取り
を繰り返してきた。そして当日になってもまだ、私を説得しよう
としているのだ。なっちゃんは面白がって攻防戦、なんて言ってい
たっけ。

だけどこればかりは絶対に嫌だ。

メイド喫茶なんて、つまりは愛想を振りまくこと。

猫をかぶって愛想を振りまくのは毎日やってるし、もうこりこりだった。

私はかたくなに、手の中のふわふわした布地をしっかりと握る。

「いやなの。私は着ぐるみがいい」

結局その主張を押し通し、私は着ぐるみ役を勝ち取った。

入り口で入場券を渡すだけの、気楽な仕事。

難を言えば暑いつてことだけど、そんなの気にしない。

顔を見られなければ、男の子に話しかけられることもないし。

着ぐるみを着て入り口に立っても、案の定、誰も私に気付くことは無くて。

気が楽だな、なんて思いながら淡々と仕事をこなす。

はじめは着ぐるみになり切ってはじめてみたけど、暑くてすぐに疲れてきた。

そんな時、中から出てきた男子生徒三人組が、「次、どこ行くー？」なんて言いながら近くの壁に寄って雑談を始めた。その会話の中で、

「安藤あさひ、居た？」

という台詞が出てきたので、疲れてやつつけない仕事になりつつあった私は思わず反応する。

また私の話題だ、と思った。全然知らない人たちなのに。別にもういいのに、その時 たまたま人があまり来てなくて。音をシャットアウトすることもできなくて、することのない私の耳に、その会話はまだ入ってくる。

「居なかった。休憩中？ 楽しみにしてたのに」
「あの笑顔がいいよなー。明るいいし可愛いし、純粹だし」

三人のうちの二人が、そんなことを話しながら盛り上がっていた。

また、噂だけで私のイメージを作り上げてる人たちだ。
仕方ないのはわかっていたけど、ちょっと嫌な気分になる。
するとそれまで黙っていたもう一人の男子生徒が、二人に口を挟んだ。

「話したことでもあるの？」

盛り上がる二人とは温度差があるような彼は、こちらに背中を向けていて顔が良く見えない。

「見ればわかるじゃん」

二人組のうちの一人がどうでもいいとばかりに言葉を返す。
と、さすがに温度差の彼も話を流すかと思ったら、まだ彼は引き下がらなかった。

「そういう先入観って、失礼なんじゃない？」

彼の発したその一言は、あまりにも意外で。
私は思わず、着ぐるみの内側で目を丸くした。

盛り上がる二人組は彼の台詞なんて相手にしてなくて、彼はそんな二人をやれやれと見守っている。あの二人よりも、寧ろ私のほうが彼の言葉をしっかりと受け止めていた。

彼にとっては、何でもない一言だったかもしれない。

だけど私にとってその一言は、いわば救世主の台詞みたいで、瞬時に芽生えた、名前も知らない人への興味。けどどうしていいかわからない。

そうやって私が何もできずにいると、ついに目的地が決定したらしく、三人組が動き出してしまった。

一番気になる、遠ざかる背中。まだ顔もよく見ていないのに、焦っていた私は、咄嗟にその男子生徒の手を掴んでしまった。

ふとした顔が、私を振り返る。

着ぐるみの小さな穴越しに、その人の顔をしっかりと見た。当然だけど、やっぱり知らない人だ。突然着ぐるみに手を掴まれて、びっくりしている様子だった。

「え……誰？」

戸惑い気味の声に問いかけられ、私は はつとした。

我に返って、そしてまた焦る。私、何がしたいんだろう。

彼の手をつかまえたまま、何もできずにいる私。

よっぽど律儀なのか、彼はされるがままに私の前に留まっていた。

「沢田ー？ 何やってんだよ、置いてくぞー」

離れた所からついに飛んできた、二人組の声。

呼ばれたのはきつとこの人の名前だ。

……沢田くん。名前を知れた。

このままじゃ迷惑をかけてしまうつてわかってたけど、なぜか手を離せなかった。つかまえておきたい、つて。

「うん、すぐ行くよ」

私の内心なんて当然知らない沢田くんは、手をつかまえられたまま顔だけ振り返って返事をした。そして再び私を見る。着ぐるみの内側に居ても、どきりとした。

「あの……どうかした？」

問いかけてられても、何も言葉が出ない。

私は思いつめたままに、手を離して身をひるがえした。

走り抜ける廊下。沢田くんはきつと、わけのわからない奴だと思っただろう。

隠れ場所とばかり女子トイレに駆け込み、着ぐるみの頭だけ外す。押さえつけられていたせいで髪が乱れていた。

「沢田くん」

と、呟いてみる。鏡に映る自分の頬が、見るからに熱い。

もう誰も好きにならない、という自分自身で作った決まりが、じわじわと胸を焦がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3869/>

超 変態的彼女。

2011年5月10日18時23分発行